

熊本県文化財調査報告 第106集

つかい やま
仕山遺跡

～国道389号道路改良工事に伴う天草郡
河浦町今富所在仕山遺跡発掘調査報告書～

1989

熊本県教育委員会

つかいやま
仕山遺跡



1989.

熊本県教育委員会



調査地から羊角湾を見おろす

序 文

天草下島の中央部に西海岸から湾入する羊角湾は、中世にはその複雑な地形を利用した河内浦氏の本拠地でありました。湾の北岸を通る国道389号は複雑な地形に沿い、カーブが多いため、現在熊本県土木部が「国道389号道路改良工事」を進めているところであります。

本書で報告致します仕山遺跡は河浦町小島と崎津を結ぶトンネルの入り口に位置するため、当初計画では遺跡の中心部を通る予定がありました。その後土木部との協議によって中心部だけは避ける設計変更がなされ、道路部分の発掘調査を実施致しました。

調査の結果、縄文時代の遺物などが見つかり、天草下島中部における当時の文化を知る手がかりをつかむことができました。

この成果が学術的研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財保護・愛護思想の普及などに役立てられることを願ってやみません。

最後に、調査及び保存などに御協力いただいた県土木部本渡土木事務所をはじめ、地元河浦町、同教育委員会および県立河浦高等学校に対し、心から感謝の意を表します。

平成元年3月31日

熊本県教育長 松 村 敏 人

例　　言

1. 本書は、天草郡河浦町今富国道389号道路改良工事に伴う「仕山遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、熊本県本渡土木事務所の委託を受け、熊本県教育委員会がこれにあたった。
3. 報告書作成にあたり、遺物、遺構の実測、トレースは、勝又俊一、岩根慶子、深水美保子、六田育子がこれを行ない、西住欣一郎の協力を得た。
4. 現地での調査は、勝又がこれにあたった。
5. 本文執筆及び編集は、主として勝又がこれを行ない、隈 昭志、桑原憲彰、野田拓治の指導、助言を得た。

本文目次

第Ⅰ章	序　　説	1
第1節	1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	4	
第2節	遺跡の歴史的、地理的環境	5
第Ⅱ章	調査の概要	
第1節	調査の経過（調査日誌）	7
第2節	調査の方法及び内容	10
1. 調査の方法	10	
2. 調査の内容	10	
第3節	調査地の土層層序	11
第Ⅲ章	縄文時代の遺構・遺物	14
第1節	遺構	14
第2節	遺物	17
	土器（甕棺）	17
	石器（磨石・石皿・凹石・石錐・抉入式石器・石斧・石鎌）	18
第Ⅳ章	まとめ	28

図版目次

第1図	周辺の地形と新路線図	1
第2図	羊角湾周辺の縄文遺跡	6
第3図	調査区及び遺物出土地点	9
第4図	土層模式図	11
第5図	No.1～No.4 調査区断面図	12
第6図	No.6～No.9 調査区断面図	13
第7図	No.5 調査区断面見通し図及び平面図	15
第8図	No.10調査区断面見通し図及び平面図	16

第9図	甕棺実測図 (No.5 調査区、No.10調査区)	22
第10図	石器実測図 (磨石・石皿)	23
第11図	石器実測図 (凹石・石錐・抉入式石器)	24
第12図	石器実測図 (石斧・石ノミ)	25
第13図	石器実測図 (石鎌)	26
第14図	熊本市「上南部遺跡」における住居址と埋甕の位置	27
第15図	上南部遺跡出土の埋甕	27

表 目 次

第1表	羊角湾周辺の遺跡一覧	6
-----	------------------	---

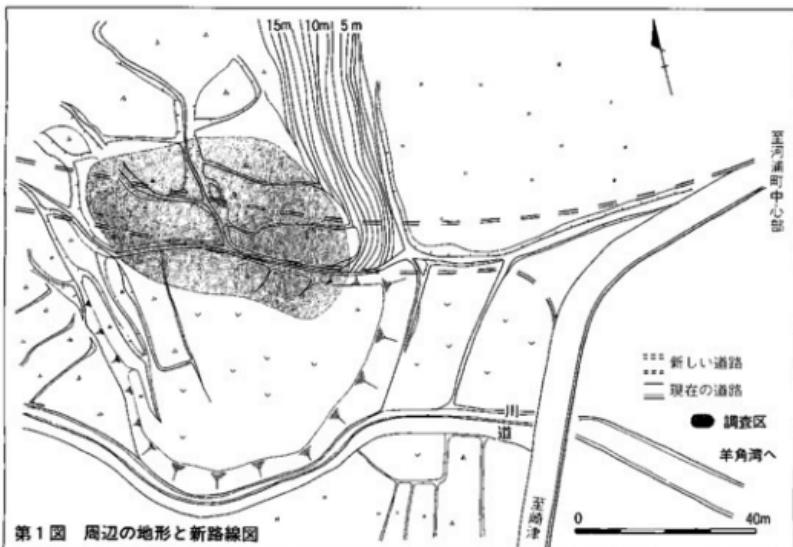
挿入写真目次

写真1	微高地に位置する仕山	2
写真2	1977年当時の景観 (石炭積出港が見える)	3
写真3	1987年調査時の景観	3

巻末図版目次

図版1	(上) 調査開始前の仕山	33
	(下) 作業風景	33
図版2	(上) 甕棺の出土状況1. (No.5 調査区)	34
	(下) 甕棺の出土状況2. (No.5 調査区)	34
図版3	石器、磨石 (1~3)、石皿 (4)、凹石 (5)、石錐 (6、7)	35
図版4	(上) 石器、抉入式石器 (8)、石斧 (10、11)	36
	(下) 石ノミ (9)、石鎌 (12~17)	36
図版5	土器 (甕棺No.10調査区)	37
図版6	(上) 土器 (甕棺、No.5 調査区)	38
	(下) 調査に携わった人々	38

第Ⅰ章 序説



第1節 調査に至る経緯と組織

1. 調査に至る経緯

昭和61年1月、熊本県土木部道路建設課から、国道389号改良事業を推進中で、天草郡河浦町仕山遺跡一帯を計画に入れているので、現地立ち会いをしてほしいとの依頼があった。そこで同年1月21日、県本渡土木事務所と文化課の課長補佐隈昭志と参事桑原恵彰が同行し現地調査を実施した。また、地元河浦町からは教育長田代主基男、学校教育課長御崎求氏らが立ち合われた。改良事業計画では、現道は海岸沿いに屈曲が大きいため、小島一崎津間をトンネルで通す予定であり、小島側からトンネルに入る手前に仕山遺跡が位置していることがわかった。そこで道路の安全も考慮し、可能な限りの遺跡の削平部分を小規模に設計する方向で検討してもらうよう協議した。なお、同日も周辺の畠地から石鎧や剝片等多数の遺物を採集した。

その後、本渡土木事務所で設計変更を検討され、その結果をもって昭和62年1月12日に県土木部道路建設課参事田中豊氏が文化課に来られ、設計図を提示された。それによると仕山遺跡

第一章 序 説

主要部分と推測される地点を保存の為に除外し、遺跡の北縁部をカットする予定になっていた。この配慮によって調査範囲も縮小され、期間も短縮できることになった。また、62年度中に発掘調査を終了して欲しい旨の要請があった。

昭和62年度における県土木部関係の発掘調査計画は、すでに県道松橋-熊本線の城南バイパスで2箇所（城南町）、主要地方道小川-嘉島線で1箇所（豊野村）の予定があり、国道389号については年間スケジュール内では、処理できない状態であった。そこで調査の優先順位については土木部内で調整をはからせてもらうことで協議が整った。

調整の結果、まず国道389号の発掘調査に着手することになり、他は仕山遺跡調査終了後の62~63年度で対応することになった。そこで正式に昭和62年9月5日付け本土第1290号で、本渡土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査についての依頼があった。文化財保護法上の手続き「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」は、昭和62年10月30日付・本土第1748号で本渡土木事務所長（徳永康則氏）から提出され、昭和62年11月10日付・河教第1066号で、河浦町教育長（竹口英國氏）から進達された。これをうけて県教育長（田嶋喜一）から昭和62年11月16日付・教文第678号で河浦町教育委員会を経て通知書を送付した。発掘調査は昭和62年11月16日から着手し、文化課参事桑原恵彰の指導で、文化財保護主事勝又俊一が担当することになった。（限 昭志）



写真1 微高地に位置する「仕山」

第1節 調査に至る経緯と組織



写真2 1977年当時の景観（石炭積出港が見える）



写真3 1987年調査時の景観

第Ⅰ章 序 説

2. 調査の組織

調査責任者 丸木 保賢 (昭和62年度 文化課課長)
江崎 正 文化課課長 本年度
林田 敏嗣 文化課課長補佐 昭和62・63年度

調査総括 隈 昭志 文化課課長補佐
桑原 恵彰 文化財調査係長 (昭和62年度参事)

調査事務 松崎 厚生 昭和62年度・63年度 主幹・経理係長
谷 貴美子 昭和62年度 主任主事
上村 柏司 主事
泉野 順子 主事

発掘調査 勝又 俊一 文化課文化財保護主事・発掘調査主任

遺物写真 白石 嶽

発掘作業 田中 哲夫、田中ミヨシ、井戸 実雄、大田 五八、田中ヒテ代
田中 卵太郎、太田 イツヨ

整理作業 六田 育子、深水美保子、岩根 凛子
笠間いつ子、塩田喜美子、重永照代、永広綱代、水本寿美子、瀬上慶子

第2節 遺跡の歴史的、地理的環境

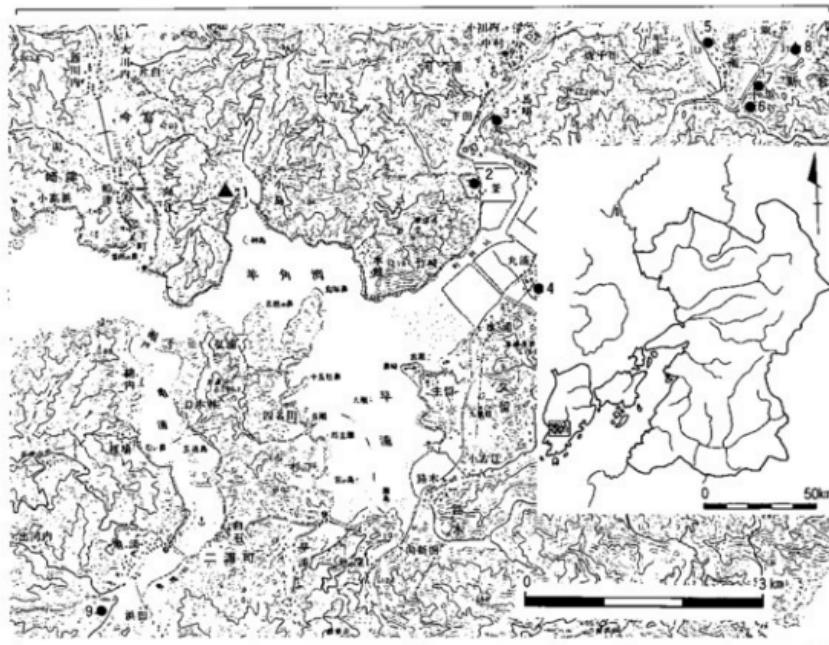
天草下島の南半部に、西側から東西に細長く複雑に湾入する羊角湾があり、湾頭は一町田川の河口となっている。この一帯は13~17世紀のころ河内浦氏（のち天草氏）の本拠地として栄えた地域で、河口の少し上流の河内浦城やキリスト教伝道の布教者養成を行った天草学林跡などの遺跡が残っている。この湾の北岸、ほぼ中央部に小島集落があり、その西側に海に突き出た埋め立て地があるが、ここは炭鉱開山までの石炭積出港であった。遺跡はその後背地の山麓斜面に舌状に突き出したテラス（標高10~15m）に立地する。海岸沿いにある国道389号が整備されるまでは、この仕山から山越えをして、崎津側の向江に抜ける近道が利用されていたが、現在ではほとんどが利用されず忘れられつつある。

この仕山遺跡は、筆者が昭和34年~36年度県立一町田農業高等学校（現河浦高等学校）に勤務していた昭和35年6月5日、当時生徒であった田中宗治、田中英機、大田雄幸の三君と同行して発見したものである。当日は土器片3、石鏃7、その他の石器6、剣片55計71点を採集した。遺跡の中心部は河浦町今富字小島仕山ゆうてじ36番で、当時の所有者は友野常太郎であった。土器片は僅か3片で、表面の風化がひどく判断がむずかしかったが、うち1片については、「御領式土器系統で山形の低い並状口縁部と考えられる。」（限昭志『河浦町郷土史（第3号）』河浦町教育委員会。昭和37年）との所見を述べた。

天草島は沈降海岸がよく発達しており、縄文時代の遺跡は海岸に臨んだ低いテラスや砂州、地域によってはすでに沈降した海岸に立地する場合もあり、いずれも遺跡の規模は小さい。五和町二江の「沖の原遺跡」や昭和62年度に牛深市教育委員会（調査責任者熊本市立熊本博物館富田絢一氏）によって確認された牛深市深浦町の「椎の木崎遺跡」などは例外的な規模といえる。

羊角湾周辺の縄文時代遺跡は第2図及第1表に示すとおりである。土器片を確認出来た例は少なく、ほとんどが石器および剣片などである。発掘調査されたのは、ここに述べる仕山遺跡だけであり、文化小期や遺跡の性格を推察するのは困難であるが、立地や規模等から一時的なキャンプ（生活の場）ではあるまいか。

その他河浦町の縄文時代遺跡としては東海岸の宮野河内に上原、上平、女岳出、竹ノ崎の4遺跡、一町田川中城に段ノ原、繁尾、平野の3遺跡、上流の今田川流域に、今田、上今村、茶園原の3遺跡等が知られている。いずれも小規模な遺跡である。最近天草地方では本渡市の黒木雄二氏の精力的な踏査によって、遺跡数がかなり追加されていると聞くが、上記の遺跡は『河浦町郷土史第三号』及び県教育長文化課に備えている遺跡台帳によったものである。（限）



第2図 羊角湾周辺の縄文遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考（主な出土及び採集遺物）
1.	仕山	河浦町今富字仕山ゆうてじ	縄文時代後、晚期
2.	妙見	〃 河浦字下田妙見	打製石斧
3.	丸山	〃 " 下田丸山	石鏃
4.	九浦	〃 久留字九浦	石鏃
5.	小塚波	〃 新合字平床	石鏃、石斧
6.	市之瀬	〃 新合字市之瀬	石鏃
7.	人數塚	〃 新合字十原	石鏃
8.	帶取	〃 新合字帶取	石器材料片
9.	家ノ前	〃 牛深市二浦町字龜浦	土器片

第1表 羊角湾周辺の遺跡一覧

第II章 調査の概要

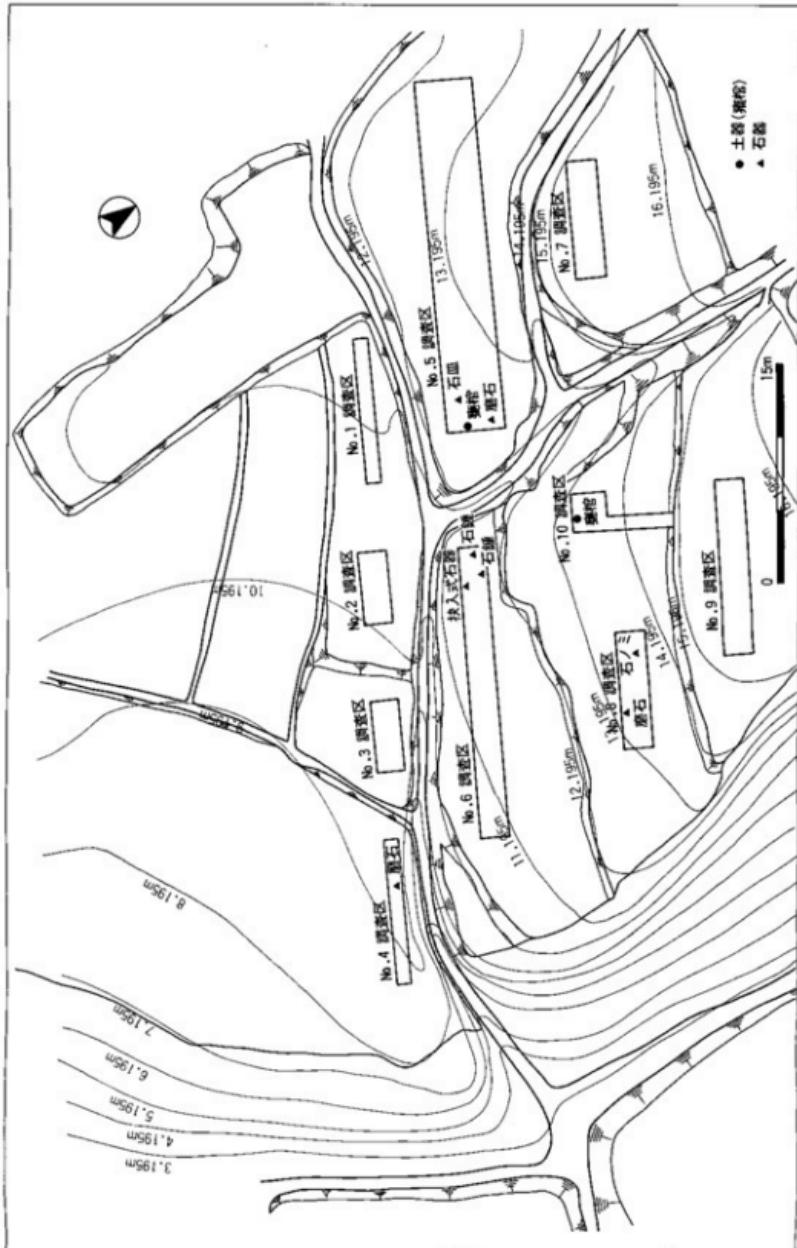
第1節 調査の経過（調査日誌）

1987（昭和62年）

- 11月11日（水） 河浦町での文化財調査開始の旨を県本渡土木事務所丸尾氏に伝える。
 その後、調査地へ赴く。
- 12日（木） 長期滞在となるので、河浦町の旅館へ挨拶。
- 13日（金） 調査事務所を設置。町教育委員会へ挨拶。
- 16日（月） 遺跡周辺の雑木の伐採、草刈りを行なう。（～19日）
- 17日（火） 地形測量及び調査の為の基準杭設定。
- 18日（水） 調査地の地形測量（1：200）及び周辺の写真撮影。
- 19日（木） 伐採した木や草を焼き払う。（～20日）
- 20日（金） 調査地の段々畑に沿って、調査区（ここの場合トレンチ）を設定する
 （10箇所）
- 24日（火） №.1～№.4 調査区を掘る。第II層が赤土（ローム層）、III層は、岩盤が見られ、各調査区とも遺物は含まれない。土がたいへん固く、作業は困難を要する。
- 25日（水） №.5 調査区設定、発掘。
 13：30 初めて遺物が出土。縄文晩期土器（甕）と考えられ、口縁部は擾乱を受けている。しかし調査の楽しみが出てきた。続いて石皿、磨石も出土。
- 12月1日（火） №.1、№.2、№.3 調査区南側土層断面実測。
 （縮尺1：10）№.5 調査区発掘。第II層は、たいへん薄く、確認されない所もあった。
- 2日（水） №.1～№.4 調査区埋めもどし。№.6～№.10 調査区設定、№.4 調査区土層断面実測。
 14：40 河浦町教育長竹口英國氏、社会教育課長御崎求氏視察。

第II章 調査の概要

- 14：50 本渡土木事務所丸尾氏、町建設課より調査区内の立木伐採の件で來訪。
- 12月3日(木) No.5、6調査区発掘。午後、測量上ポイントを高い位置に移動する。
9：40 KKT(熊本県民テレビ)取材。
14：30町教育委員会一同視察。
14：40県文化課長丸木保賢、同課長補佐隈昭志視察。
- 4日(金) 地形測量。No.6調査区～No.8調査区発掘。
No.6調査区II層(褐色土層)より石鎌出土。調査区の写真撮影。
16：00 No.8調査区より、石ノミ(磨製石斧)出土。
- 7日(月) No.8、9調査区発掘。No.10調査区設定。
No.5、6調査区平面及び断面実測。
14：00 天草毎日新聞記者取材。
14：30町総務課広報担当取材。
- 8日(火) No.5調査区埋めもどし。No.7～9調査区精査。
1m毎にセンター測量。No.10調査区発掘、ここからNo.5調査区出土甕と同時期のものが出土。
9：30町文化財保護委員視察。
- 9日(水) No.6調査区写真撮影。No.10調査区出土土器精査。
10：20熊本日日新聞牛深支局取材。
No.7、8調査区土層断面実測及び写真撮影。
- 11日(木) No.6、7調査区埋めもどし。
- 14日(月) No.8、9調査区埋めもどし。No.10調査区完掘。
14：00文化課参事平岡勝昭氏他数名視察。
16：00天草在住の黒木雄二氏来訪。
- 15日(火) No.10調査区土層断面、平面実測。
- 16日(水) No.6調査区出土石器のレベル測量。
- 17日(木) No.10調査区遺物取り上げ後、全調査区埋めもどし終了。
器材片づけ。事務所内清掃。
遺物を熊本県文化財収蔵庫へ運搬。



第3図 調査区及び遺物出土地点

第2節 調査の方法及び内容

1. 調査の方法

前述した通り昭和30年代の表面採集では、この台地上から縄文時代後晩期の石器（石鏃、剝片など）が見つかっており、最近でも数点の石鏃が出土した。道路予定地は、表面採集で出土した舌状台地の南端よりやや北側の傾斜面となった。そこで路線内の傾斜地である段々畑及び南側の芋畑約1,000m²を調査対象とした。

調査地は、天草海岸特有の入りくんだ丘陵上にあり、狭少な段々畑が発達している。このため畑ごとに調査区を設定し、調査を開始することにした。

調査区は、南側よりNo.1～No.10までの10箇所とした。なお表土剥ぎは、調査区が狭少で段差がいくつも存在することから人間の労力による手振りで進めることにした。又、隨時、地形測量を行ない、調査を進めた。調査員が1人の為、調査には時間を費し、充分な協議・検討ができなかった。

No.1調査区～No.4調査区は、芋畑となっており、バックフォーによる表土剥ぎを行なわないので、作業はスコップによった。

2. 調査の内容

No.1調査区を見ていくと第I層は淡褐色の耕作土で地表より、約10cmという薄いものであった。第II層は移植ごてによる、遺物・遺構の検出を進めるが粘り気の強い層で作業は困難を極め、遺物は見られない。(10cm～約30cmの厚さ)

第III層は、砂、礫を含む赤褐色の層でII層より更に固く、粘質の層であり、岩盤（地山）と考えられる。

No.2、No.3調査区までは、No.1調査区の土層とほとんど変化はなく、No.2調査区の第II層に5mm～1cm大の小石のブロックが數ヶ所見られた程度で、遺物・遺構の検出はなかった。

ところが、No.4調査区第II層（淡褐色土層）から磨石が出土し、最初の遺物発見となる。この調査区のある箇所は、舌状台地の東端部で荒地となっていた所である。

No.1～No.3調査区まで遺物が検出されなかったのは、少ない土地を有効利用するため何度もなく削平を受けたため遺物包含層がなくなったものである。No.4調査区付近は、台地の末端で削平をまぬがれて遺物がわずかに残存したと考えられる。

調査地の北側であるNo.7調査区は、第I～第II層にかけて現代のものと思われる摺鉢片が出土し、縄文時代の遺物は見られず、擾乱を受けていることが分かった。

第3節 調査地の土層層序

No.9調査区では、No.1～No.4調査区で見られた第II層が攪乱を受けて、存在せず、III層の赤土（粘土層）がすぐ下に重なっていた。遺物の包含は見られなかった。

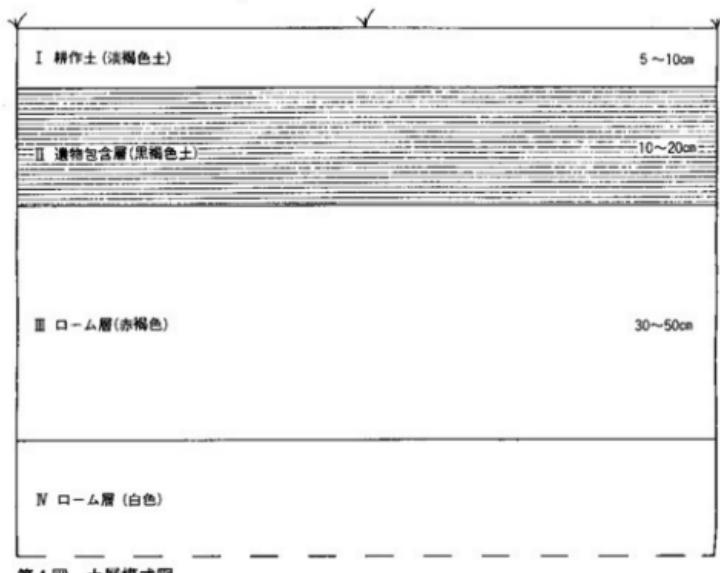
なお、No.5、No.10調査区については、甕棺が出土したので遺構として考え、第III章第1節で検討することにした。

第3節 調査地の土層層序

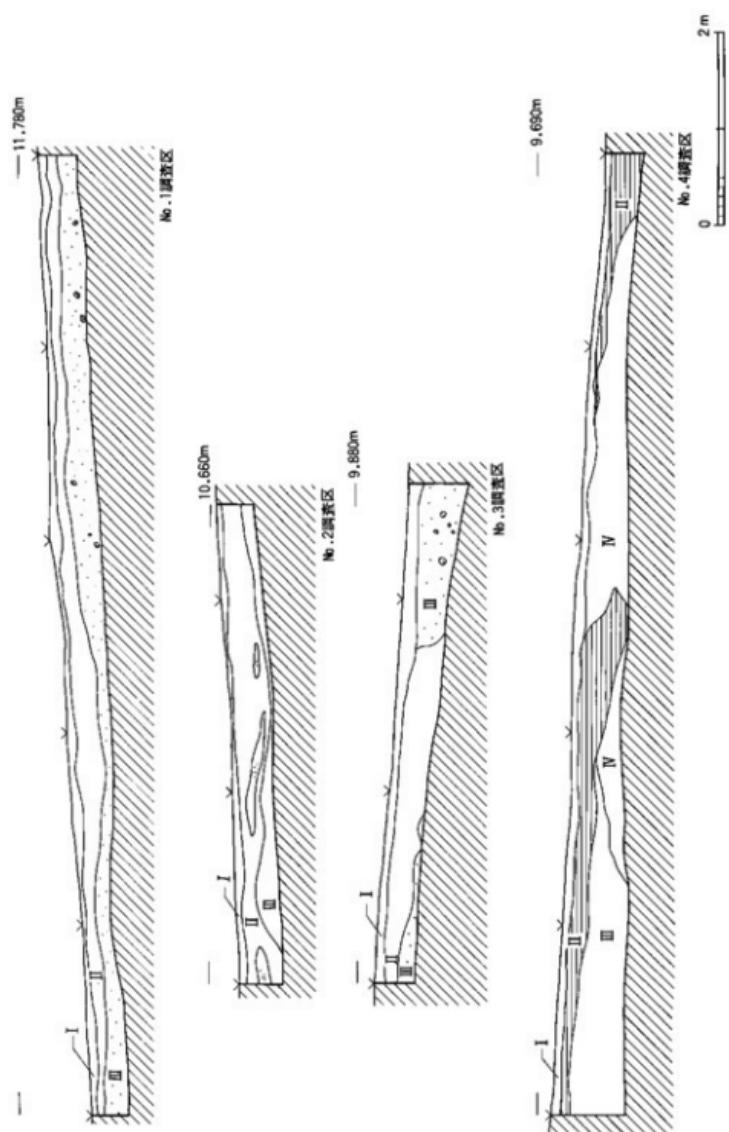
「仕山」での基本層序は、第I層耕作土（淡褐色土）、第II層（黒褐色土）、第III層は、かなり粘質の強い赤褐色土（ローム層）となっている。第IV層は、灰黒色の粘土を含む白粘土である。この中で文化層（遺物包含層）は、第II層と考える。

しかし、調査区全体としては、かなり削平を受けており第II層から遺物が出土する割合もかなり少ない。

調査を行なった層位は、第III層までとした。これは、第II層（文化層）から下層では、遺物の包含が認められなかった点、又第III層から下は、角礫、小石などが含まれ、岩盤と考えられた点を考慮して決定した。

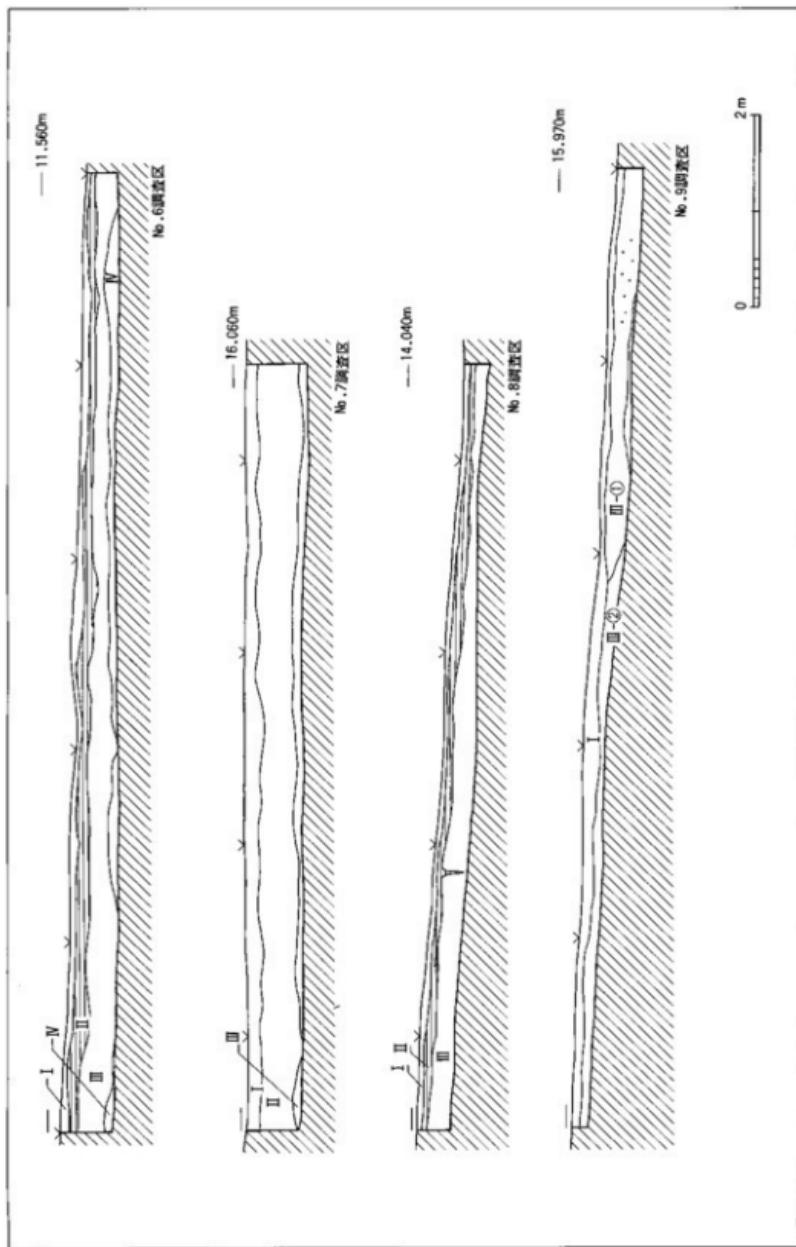


第4図 土層模式図



第5図 No. 1～No. 4 調査区断面図

第3節 調査地の土層層序



第6図 No. 6～No. 9 調査区断面図

第III章 縄文時代の遺構・遺物

第1節 遺構

No.5調査区及びNo.10調査区からは、埋甕2個体分が出土し、ある程度の時代の判定が可能となつた。

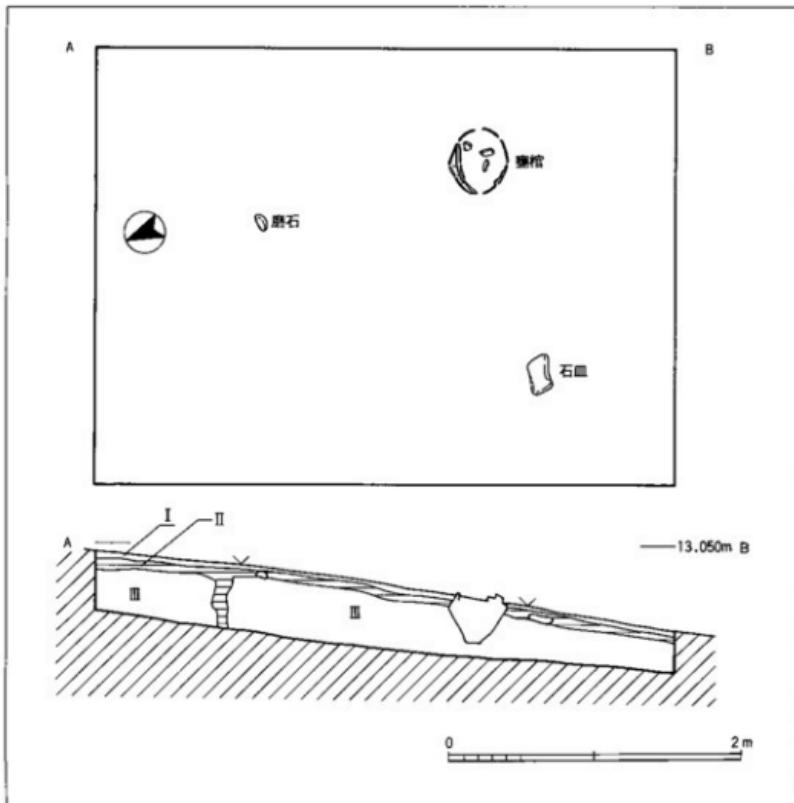
第7図No.5調査区は、I層～III層まで掘り下げた。ゆるやかな傾斜地である。ここでも表土層は、10cm以下で、第II層の文化層と共にかなり薄かった。I層とII層の間でII層の土色とよく類似した土器片が出土した。表面もろく風化がひどいため、不明な点が多く、それが口縁部だとわかるにはかなりの時間を要した。その後検出作業を進めて行くと第III層のローム層にかけ、胴部～底部が出土し、ほぼ完形に近い甕の存在を知ることができた。なおこの調査区からは、同じく第II層から石皿及び磨石も出土した。

土器は、ローム層を掘り込んで据えられており、甕棺と考えられる。ただし甕の掘り込みラインは、第II層が極めて薄く、第III層のローム層も大変固く又土器と土色が類似しており確認することが出来なかつた。当初、口縁部片と胴部～底部は、その層位状況から同一個体と考えたが、土器を取り上げてよく器形、色調、胎土を観察していくと形態の違う土器であることがわかつた。甕の口縁部と考えていたのは、浅鉢の口縁であり、胴部、底部は甕であること。つまり、本来は、甕を埋めてその上から浅鉢を載せてあつたものと考えられるのである。それがある時期に攪乱を受け、より表土に近い鉢の部分が壊され、より深い位置にある甕の部分は攪乱をまぬがれて残つたものである。

第8図のNo.10調査区の甕棺も段々畠の傾斜から出土した。この甕棺も第III層のローム層まで掘り込んであり、No.5調査区出土の甕棺と同様、浅鉢を甕の上部に頂いていたことがわかつた。この二つの調査区から出土した甕は、胴部下半がやや張り、器面調整も荒く型式としては、縄文時代晚期の天城式または、熊本市「上南部遺跡」出土の上南部III期と考えられる。上部に蓋として載せてある浅鉢は、第9図遺物番号①口縁部に一条の沈線を有し、頭部にかけて内溝しているのに対し、②は、頭部が短く口縁部が外反する。天城遺跡の形式分類でいければ①が浅鉢A-3グループのdに類し、②の浅鉢が浅鉢A-3グループのeに入るものと考えられる。

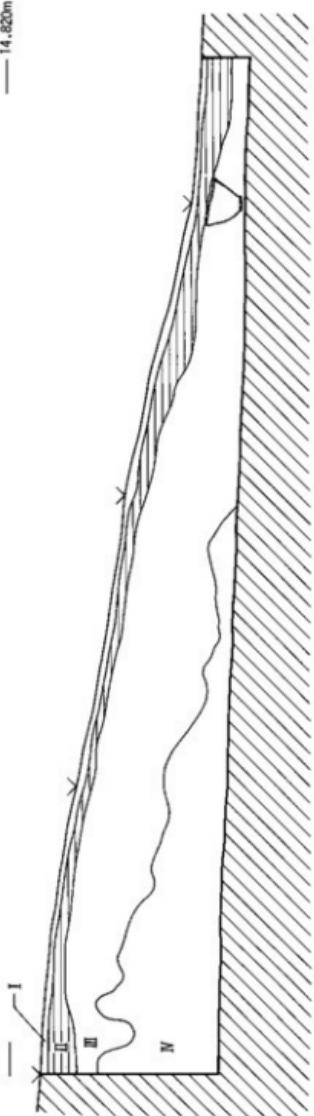
第1節 造構

※ 墓館と埋甕について少し述べてみよう。埋甕は、その出土状況からみて住居内と住居外から出る場合がある。縄文時代に見られる住居内出土の埋甕は、出産風俗と深い関わりがあると言われる。住居外では、^{ABD} 埋納施設と考えられ特に住居内埋甕と区別して「^{ABD} 墓館」と呼ばれている。^{ABD} 仕山では、現地の状況から住居外ととらえ墓館として扱う。上南部遺跡では、縄文時代の住居址 5 軒と縄文晚期の埋甕が 17 個体出土している(第14図)。ここでの埋甕はいずれも住居址外から検出されており、「仕山」の出土例と極めて類似し、土器の時期を知る上で参考になり、興味深い。

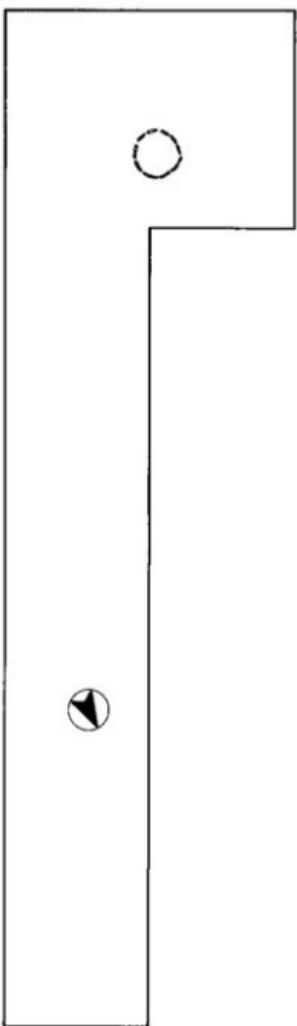


第7図 No.5 調査区断面見通し図及び平面図

14.820m



2m
0



第8図 No.10調査区断面見通し図及び平面図

第2節 遺物

1. 土 器 (甕棺)

第9図-1 上 蓋 (No.5調査区)

- (a)胎土 砂粒を多く含み粗である。
- (b)焼成 不良。
- (c)色調 外面は淡黄褐色。内面は、淡黒褐色。
- (d)推定口縁径 39.8cm。
- (e)特徴 口縁が現存、口縁部に一条の沈線を有し、つまみがつく。口縁から頸部にかけて内湾、「く」の字形となっていく。内面に比べて外面の風化がかなり進んでいるため、ボロボロとくずれてしまう。

第9図-1 下 蓋 (No.5調査区)

- (a)胎土 不良砂粒を多く含み、ボツボツと空間がある。
- (b)焼成 不良。
- (c)色調 外面は赤褐色、内面は暗褐色。
- (d)推定底部径 8.8cm
- (e)特徴 底部から胴部にかけての甕である。これは平底で底部から1.6cmの所まで外反し、そこから胴部にかけてゆるやかに立ち上がる。出土した時点では、胴部の下半分ほどが確認された。

第9図-2 上 蓋 (No.10調査区)

- (a)胎土 砂粒を多く含むが、第9図-1の上蓋より密である。
- (b)焼成 やや良である。
- (c)色調 外面は淡褐色。内面も淡褐色であるが、部分的に黒褐色を呈する。
- (d)推定口縁径 28.2cm
- (e)特徴 口縁部から胴部にかけて存在する。胴部から頸部にかけて、ゆるやかに曲線を描き、頸部から口縁にかけて直に立ち上がる。口唇部は、わずかに欠けているが外反し、水平に向かう。

第9図-2 下 壺 (No.10調査区)

- (a)胎土 やや大きめの砂粒を多く含む。
- (b)焼成 不良である。
- (c)色調 外、内面とも赤褐色。
- (d)復元底部径 直径8.5cm、推定胴部径約29cm
- (e)特徴 第9図-1の下壺と同規模、同器種の壺と考えられる。相違点としては、底部が2mmほどあげ底となっている点であり、胴部は肩部にかけてゆるやかに立ち上がる。

2. 石 器

磨 石

第10図-1

- (a)石材 安山岩 (b)出土地 No.4 調査区第II層
- (c)法量 長さ12.5cm、幅9cm、厚さ4.7cm、重さ780.40g
- (d)色調 暗褐色
- (e)特徴 両面にわたり、磨耗した痕が見られる。完形であり、側面に敲打痕も見られる。

第10図-2

- (a)石材 安山岩 (b)出土地 No.8 調査区
- (c)法量 長さ11.4cm、幅8.2cm、厚さ4.4cm、重さ610.75g
- (d)色調 灰褐色。
- (e)特徴 両面にわたり、磨耗痕が見られ、側面にも敲打のあとが残る。

第10図-3

- (a)石材 安山岩 (b)出土地 No.5 調査区第II層。
- (c)法量 長さ11.4cm、推定幅10cm、厚さ6.1cm、重さ117.20g
- (d)色調 灰褐色。
- (e)特徴 両面中央部に磨耗した痕がある。全体の半分を欠損する。

石皿

第10図-4

- (a)石材 砂岩 (b)出土地 No.5 調査区。
 (c)法量 長さ25cm、幅15cm、厚さ7cm、重さ3,940g
 (d)色調 明褐色。
 (e)特徴 表面中央部に磨耗した痕跡あり。側面端部に敲打痕あり。完形である。

凹石

第11図-5

- (a)石材 砂岩 (b)出土地 排土中。
 (c)法量 長さ8.1cm、幅7.5cm、厚さ2.6cm、重さ237.30g
 (d)色調 灰褐色。
 (e)特徴 両面とも中央部にわずかな凹みがあり、何かを載せて使用したものと考える。

石錐

第11図-6

- (a)石材 安山岩 (b)出土地 No.6 調査区第II層。
 (c)法量 長さ8.6cm、幅7.5cm、厚さ2.6cm、重さ263.80g
 (d)色調 明褐色。
 (e)特徴 全体に風化がかなり進んでいる。両端に加工痕あり。

第11図-7

- (a)石材 片麻岩 (b)出土地 No.8 調査区排土。
 (c)法量 長さ7.4cm、幅7cm、厚さ1.7cm、重さ151.55g
 (d)色調 乳白色。
 (e)特徴 両端部を加工してある。

抉入式石器

第11図-8

- (a)石材 安山岩 (b)出土地 No.6 調査区第II層。
 (c)法量 長さ8.7cm、幅8.7cm、厚さ2.4cm、重さ298.00g
 (d)色調 灰褐色。
 (e)特徴 両端部の中央が両面から打撃を加えてある。両端の突出部を使用したというより、中央凹部を刃として用いたものと考えられる。片方の端部は、欠損している。

磨製石斧（小型石ノミ）

第12図-9

- (a)石材 砂岩 (b)出土地 No.8 調査区II層。
(c)法量 長さ9.2cm、幅8.9cm、厚さ2.6cm、重さ53.23g
(d)色調 灰黒色。
(e)特徴 基部を欠損し、刃部は少々刀こぼれをしている。両刃で、両面とも現存する中央部まで稜線が入る。中央断面形は、橢円形を呈する。

打製石斧

第12図-10

- (a)石材 凝灰岩 (b)出土地かく乱層。
(c)法量 長さ6.5cm、幅6.0cm、厚さ2.1cm、重さ121.20g
(d)色調 灰褐色。
(e)特徴 基部が欠損しており、風化がかなり進んで丸くなっているが、側面及び、刃部に加工痕が見られる。両刃。

第12図-11

- (a)石材 凝灰岩 (b)出土地擾乱層。
(c)法量 長さ7.7cm、幅7.4cm、厚さ1.2cm、重さ117.20g
(d)色調 灰褐色。
(e)特徴 側面及び平面片がわに打撃痕があるが、風化が進んでいる。

石鎌

第13図-12

- (a)石材 玄武岩 (b)出土地 No.6 調査区第II層褐色土より。
(c)法量 長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.49cm、重さ1.89g
(d)色調 灰褐色。
(e)特徴 鎌頭をわずかに欠損するが完形である。両面に加工が施されている。有茎で綫長三角形を呈し、中央部がふくらんでいる。

第13図-13

- (a)石材 黒曜石 (b)表採資料。
- (c)法量 長さ0.92cm、幅0.89cm、厚さ0.26cm、重さ53.23g
- (d)色調 灰黒色。
- (e)特徴 基部を欠損し、刃部は少々刃こぼれをしている。両刃で、両面とも現存する中央部まで稜線が入る。中央断面形は、橢円形を呈する。

第13図-14

- (a)石材 黒曜石 (b)表採資料。
- (c)法量 長さ2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.72g
- (d)色調 光沢のある黒色。
- (e)特徴 細長の有茎の鎌である。石鎌尖端部をやや欠くが、ほぼ完形である。両面に加工が施されているが、一方の側面部は、中央部が大きくえぐられている。他方の側面は、小さざみな剥離が見られる。

第13図-15

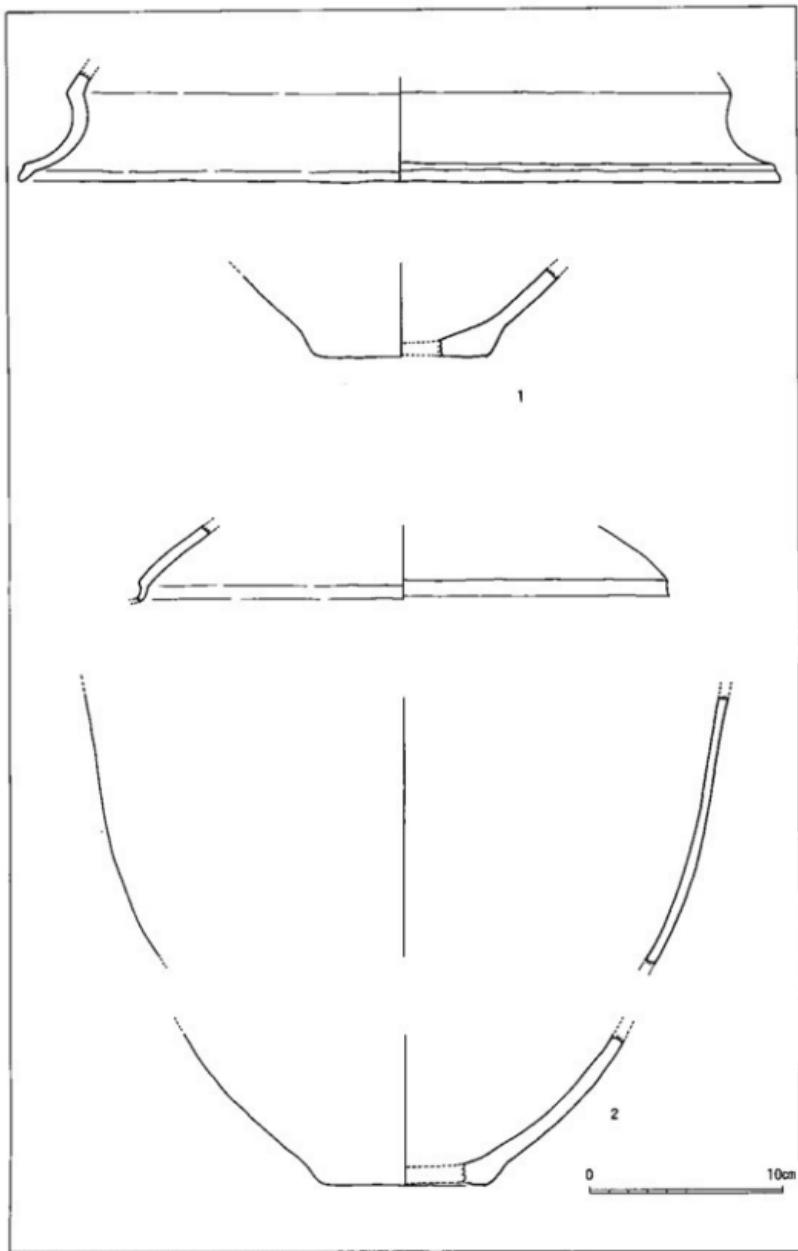
- (a)石材 黒曜石 (b)表採資料。
- (c)法量 長さ1.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.70g
- (d)色調 光沢のない黒色。
- (e)特徴 両翼は欠損するが有茎の鎌と考えられる。断面形は三角形を呈する。

第13図-16

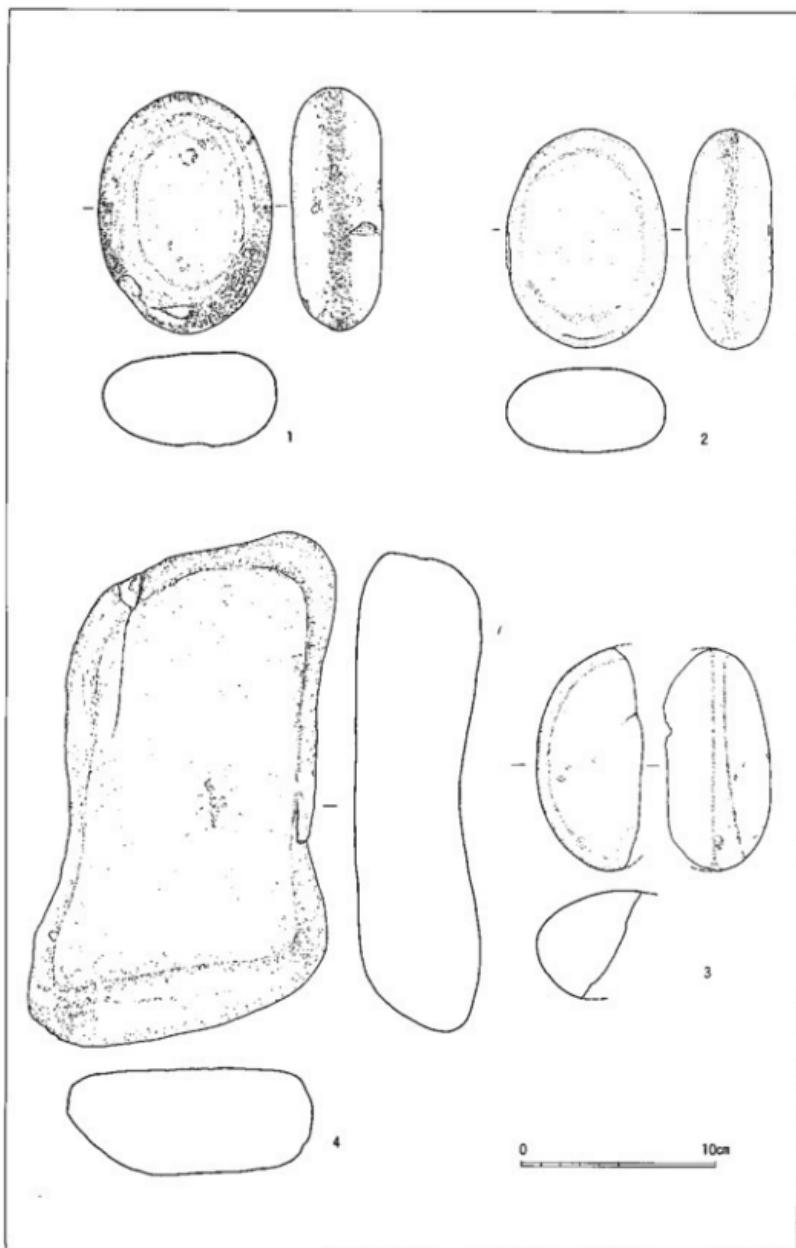
- (a)石材 黒曜石 (b)表採資料。
- (c)法量 長さ0.7cm、幅0.9cm、厚さ0.18cm、重さ0.20g
- (d)色調 光沢のある黒色。
- (e)特徴 基部は半分から折れているので、有茎か無茎鎌かはわからない。両面に加工が施されている。

第13図-17

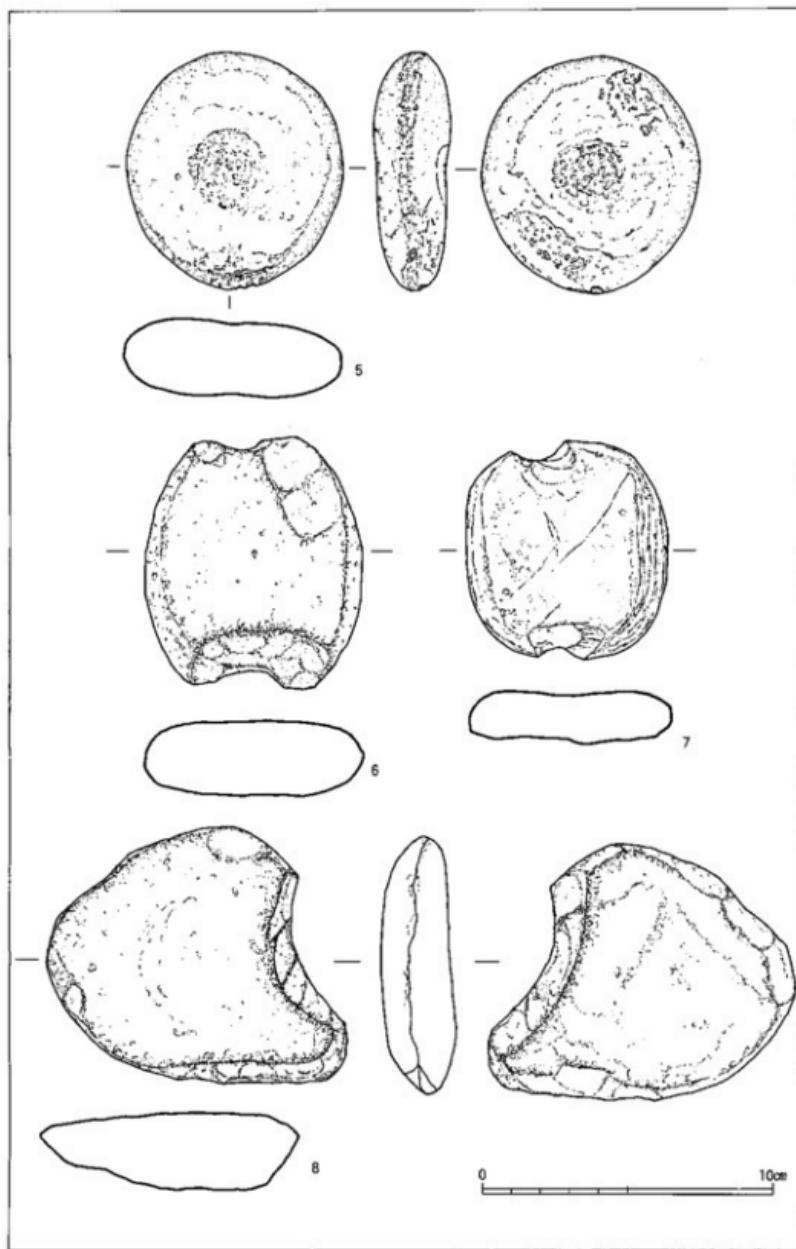
- (a)石材 黒曜石 (b)表採資料。
- (c)法量 長さ0.9cm、幅1.25cm、厚さ0.18cm、重さ0.28g
- (d)色調 光沢のある黒色。
- (e)特徴 基部は、半折するが、両面は加工してある。



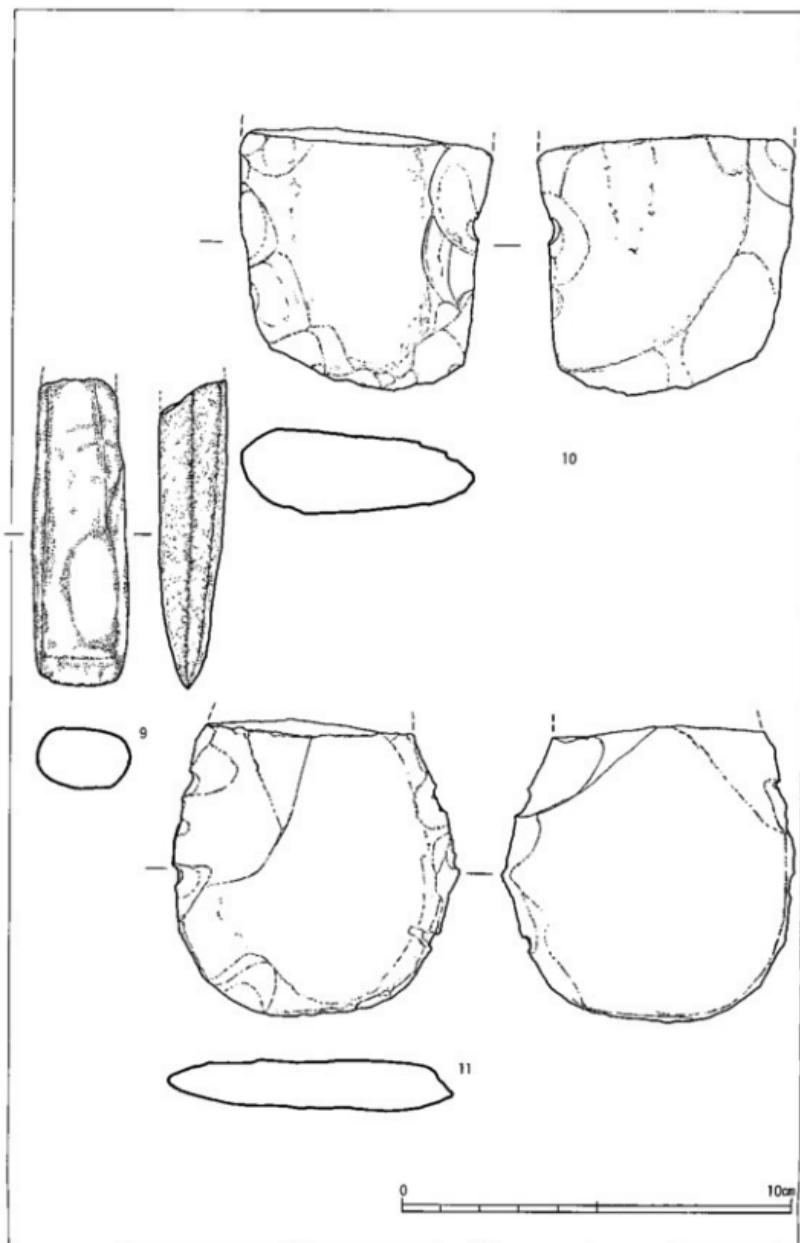
第9図 鎌棺実測図 (No.5調査区、No.10調査区)



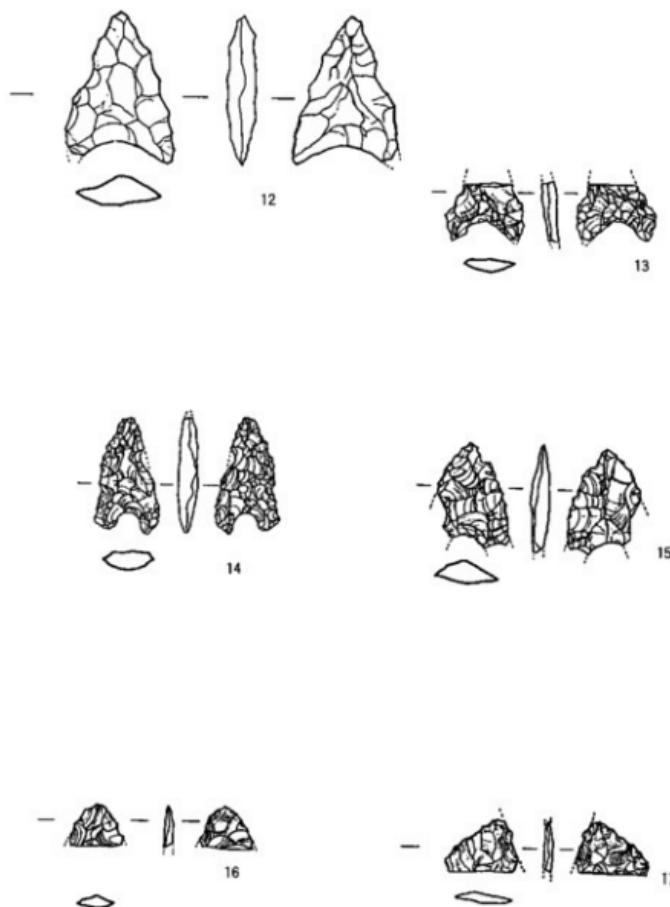
第10図 石器実測図（磨石・石皿）



第11図 石器実測図 (凹石・石錐・挿入式石器)



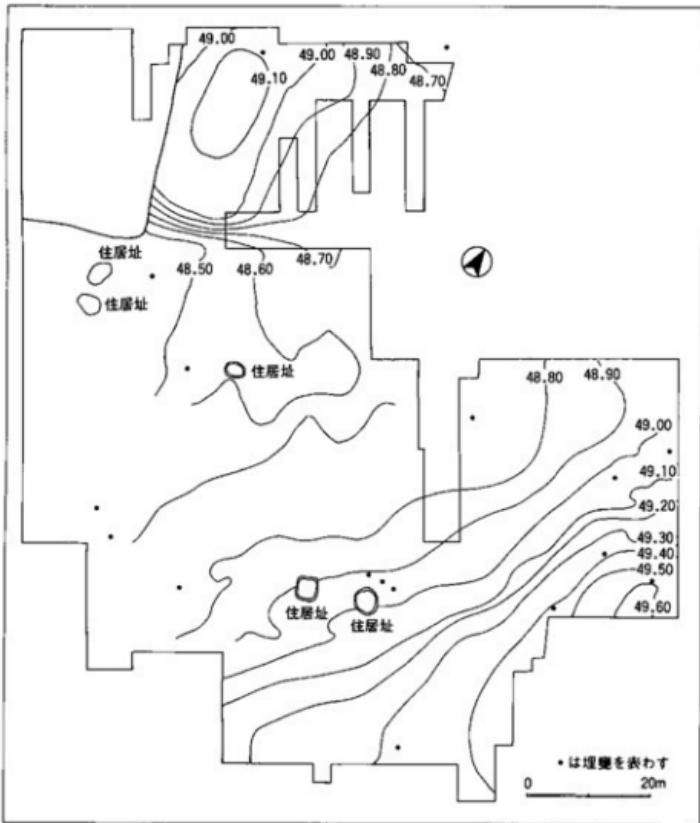
第12図 石器実測図（石斧・石ノミ）



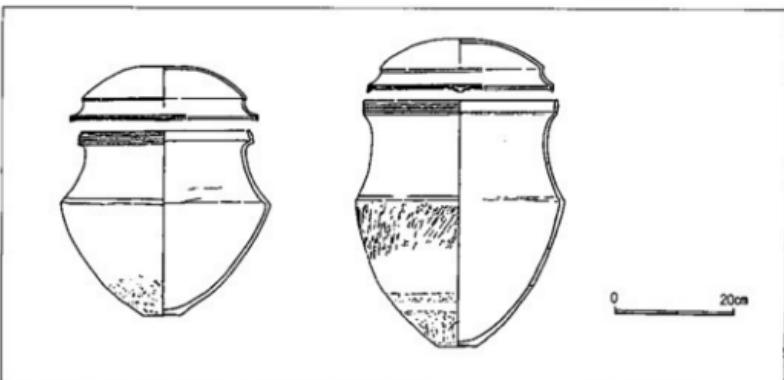
0 5 cm

第13図 石器実測図（石鏃）

第2節 遺物



第14図 熊本市「上南部遺跡」における住居址と埋壙の位置



第15図 「上南部遺跡」出土の埋壙

第IV章 まとめ

1. まず仕山遺跡出土の甕棺の問題であるが、土器の特徴および型式等から縄文時代晚期初頭のものであり、又その甕棺の構成は、浅鉢を上蓋とし、下甕に載せるという合口であることがわかった。次に第III章でも述べたが、甕棺が住居址外から出土したという点である。(もっとも「仕山」では、生活の本拠地と考えられる丘陵状の平坦な部分は、調査対象外であったため住居は、確認されていない。

しかし、調査区の甕棺が、いずれも傾斜面から出土しており、又その傾斜面は、あまり削平を受けておらず(第7図、第8図参照)当時の土層を示しており、それを観察してみた結果、住居の可能性はなく、住居外の甕棺と考えられる。つまり意識的に甕棺を住居外の少し離れた丘陵に納めたものとみてよい。

なお、甕棺の使用目的としては、土器内から人骨、炭化物などの遺物が検出されず断定はできないが、以前の研究成果や出土状況から甕棺と把えたい。^{註6}

2. 次に調査区のある微高地周辺は、山を背に、前方を羊角湾が深く入り込んで、狩猟および漁撈に適した地域と考えられる。数点ではあるが石錐、「抉入式石器」は、海を背景とした道具を駆使していたことを物語っている。

3. 狹いこの舌状台地上は、土地を有効利用するためにかなりの削平を受けている。遺物の出土した傾斜地は、遺物が出土しなかった平地と異なり、削平をいくらかまぬがれたため、当時の文化層をかろうじて残したものと考えられる。

昭和62年度「椎ノ木崎遺跡」の調査では、海岸から数多くの石器・土器が出土している。そのなかに双頭状の石器も數多く出土しており、今まで「打製靴型石器」、「双角状石器」、「尖頭状蝶器」、「あわびおこし」等さまざまな呼称で呼ばれている。だがここでは、椎ノ木崎遺跡を調査した松舟博満氏と協議した結果、これまで形式として「双角」とか「尖頭状」とか把えられていたものを、むしろ抉りを中央部に丹念に入れてあり、その部分の使用痕が認められる石器という点から抉入式石器と呼ぶことにしたい。

(註)

1. 熊本県文化財調査報告書 第47集『古保山・古閑・天城』熊本県教育委員会1980年
『縄文文化の研究第4卷縄文土器II』(所収「九州の土器」)雄山閣 1981年
2. 「上南部遺跡発掘調査報告書」 熊本市教育委員会1981年
『戸坂遺跡発掘調査報告書』(所収「千原台遺跡出土縄文土器の位置づけ」) 熊本市教育委員会1986年

3. 「埋甕—古代の出産習俗」 本下 忠 著 雄山閣1981年
 木下氏は、各地の民俗例から住居内埋甕について考察し、宗教的色彩の強い、胎盤を収納する施設と考えた。尚、この場合の住居内埋甕は、縄文中期の東日本に多く、仕山とかなりの相違点が見受けられる。

4. ①『考古学ジャーナルNo208』(所収「縄文時代の甕棺」渡辺 誠)

ニュー・サイエンス社1982年

渡辺氏は、全国の人骨出土の甕棺を提示し甕棺の形態、埋置状態、法量などを検討された。縄文時代甕棺の特色として「幼児埋葬を主体とすること、成人埋葬は二次埋葬であり」、「埋甕は甕棺とまったく同じではない。女性がよくまたぐ戸口の下などに、妊娠呪術として埋設されたものを特に甕棺から区別して埋甕とよんでいるが」誤解も多いと述べている。

②『縄文文化の研究第9巻、縄文人の精神文化』(所収「甕棺葬」菊地 実) 雄山閣1983年
 「胎盤収納説」や「幼児埋葬説」など論争を巻き込んだ住居内埋甕の問題も菊地氏によって新しい段階に入ってきた。つまり前述の木下氏の住居内埋甕の統計で、人骨の検出が皆無であること、胎盤などの後産も腐食して確認できない点を挙げ、住居内埋甕の再検討の必要性を説かれた。又住居内か住居外かと言う問題より「甕棺とする事例を、土器内部に明らかに人骨の収納されていたものだけを扱う」など事実の本質に迫る検討をされた。

5. 前述の註2で「上南部遺跡」では、住居址外の甕を埋甕ととらえてあるが、菊池氏の説からすれば正当性をもつ。

6. 熊本県「蟲貝塚」、「御領貝塚」 1965年調査では、単甕棺の幼児骨が出土。

『城南町史』 1965年

7. 「考古学と地域文化」(所収「双角状石器小考」) 松藤 和人 1987年

8. 「日本民俗と南方文化」(所収「熊本県蟲貝塚出土の打製靴型石器について」)

江坂輝弥 1968年

卷 末 図 版

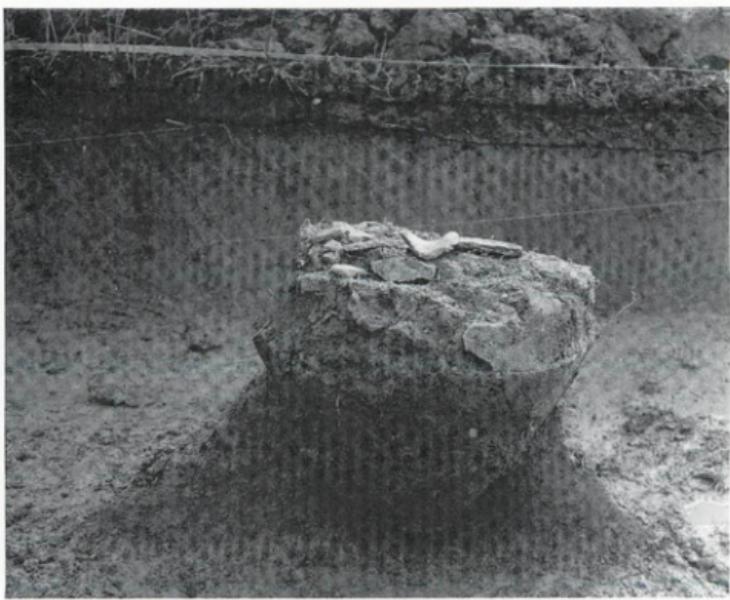
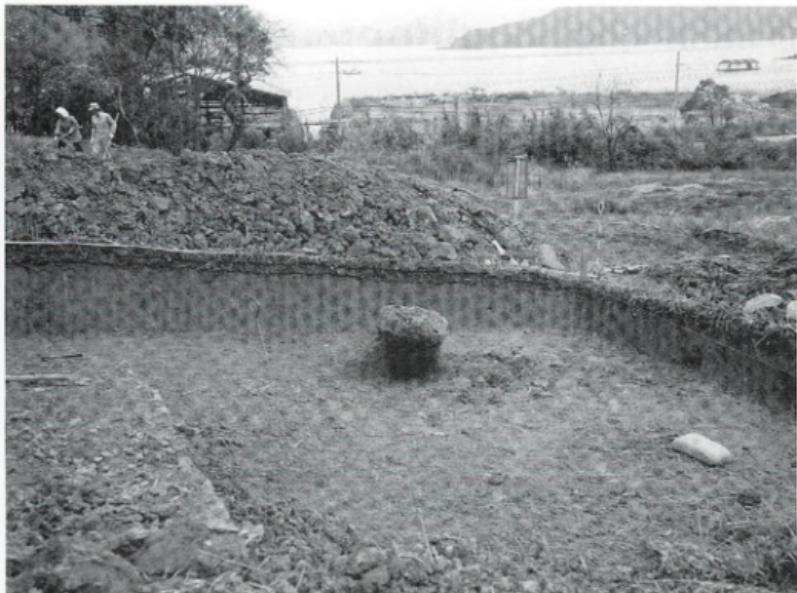
図版1



（上）調査開始前の仕山

（下）作業風景

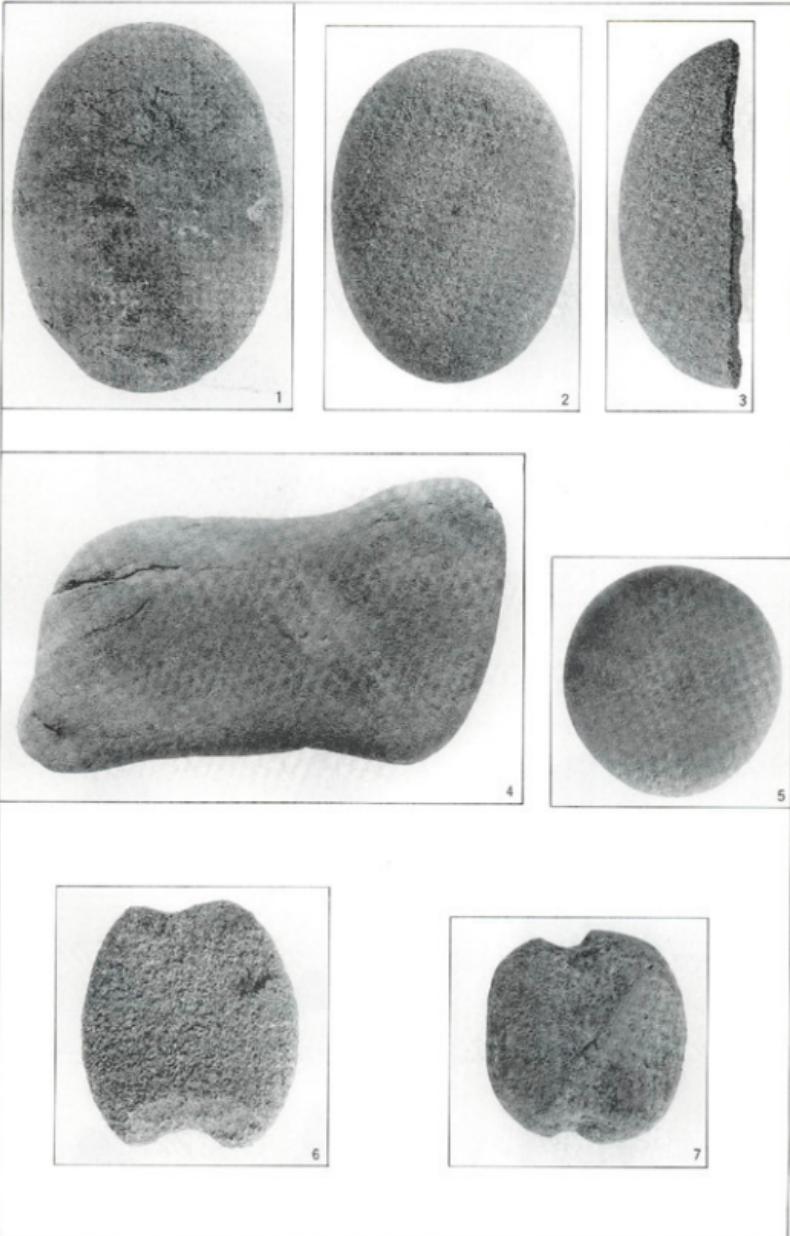
図版2



(上) 墓棺の出土状況①

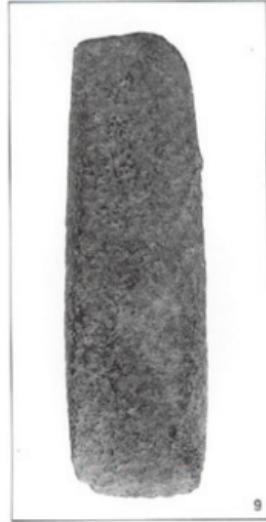
(下) 墓棺の出土状況② (いずれもNo.5 調査区)

図版3



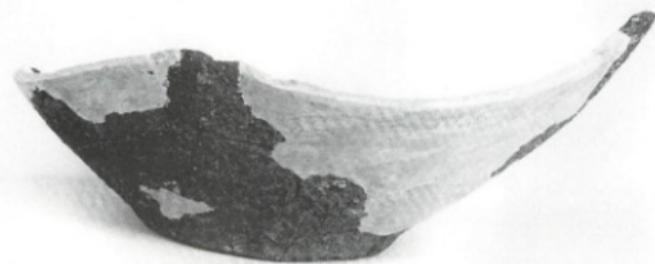
石器・磨石(1～3)、石皿(4)、凹石(5)、石錘(6・7)

図版4



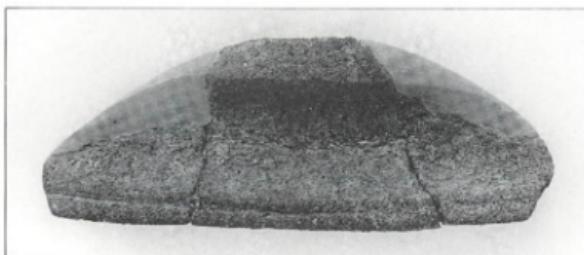
石器（上）、挿入式石器（8）石斧（10・11）（下）、石ノミ（9）、石鎌（12～17）

図版5



土器（発掘No.10調査区）

図版 6



(上) 銅棺 (No. 5 調査区) (下) 調査に携わった人々

熊本県文化財調査報告第106集

仕山遺跡

国道389号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行年月日 1989年3月31日

発 行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印 刷 株式会社 城野印刷所

63 教委 教文

(2) 007

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 106 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：仕山遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日